太陽とひまわり

瑞穂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
太陽とひまわり

【Ｎコード】
Ｎ０９６４Ｃ

【作者名】
瑞穂

【あらすじ】
私の好きなひとは、違う世界に住んでいました。

一週目　種

もう、六月だ。
制服の移行期間も後半に入り、間服のジャンパースカートを着た女子やベストの男子が減ってきた。
私も、そろそろ夏服に着替えようかな。
二つに結った髪を払って、掃除の終わった教室を出ようとカバンを持った。
ふと右を見ると、教室の窓から小柄な女の子が手を振っていた。
芹千早ちゃん。中一の時から、高二になった今までずっと同じクラスの友達だ。
「ひまわり、夢使いって知ってる？」
栗色の三つ編みが、夏服のセーラーの襟に垂れている。長さの割に細いのは、髪を空いているからだ。
千早ちゃんは、スカートのポケットから皺だらけのメモ用紙を引っ張り出した。
「悪い夢を、消してくれるんだよ」
千早ちゃんの好きなひよこ柄のメモ用紙には、電話番号が走り書きしてあった。その下には丁寧な小さい字で、”夢使い協会　ヒノ、ツキノ”と書いてある。これは何だろう。
「この前依頼したときにね、書いて貰ったの」
千早ちゃんがメモ用紙を差し出す。
正直、迷った。
一月ほど、私は嫌な夢を見続けている。
夜の道を一人で歩いていると、黒い何かに追いかけられて、逃げようとしたら足が止まる。捕まる少し前に目が覚める。たったそれだけなのに凄く怖くて、眠るのも嫌になってしまった。
夢使いが何なのかよく分からないけれど、夢を消してくれるなら、それでいい。

私は、メモ用紙を受け取った。
「電話したら教えてね。じゃ、委員会があるからコレでっ」
千早ちゃんはカバンを肩に掛けて、廊下をぱたぱたと走っていった。小柄なせいか、カバンがやけに大きく見える。もう高二なのに、まだ中一に間違われることもしばしばある。
「夢使い、ね」
ひよこ柄のメモ用紙をポケットに入れて、私も教室を出た。

昨日のことは、本当なのだろうか。
私は今、千早ちゃんと一緒に、学校の近くにある「カフェ・カノン」のテーブル席に座っている。
「誰か待ってるの？」
マスターのトキさんが、カップを拭きながら訊いた。
夢使いと待ち合わせ、なんて言えるわけがない。

昨日私は、メモ用紙に書かれていた番号に電話を掛けた。
ベルが何回も鳴ったのに、誰も出ない。諦めようと思ったら、九回目のベルで繋がった。
「もしもし、……夢使い協会さんですか？」
「はい、こちらは夢使い協会です。依頼の方ですか？」
十代半ばくらいの、女の子の声だ。
「え？　は、はい！　えっと……」
「お名前をお聞かせ願えますか？」
緊張で声が裏返る私をよそに、女の子の声は落ち着いた様子で話す。
「菊谷ひまわり、です」
「了解致しました。以上で受付は終了です」
え？
「明日の午後、カフェ・カノンに伺います。お時間はどうなさいま

すか？」
「えっと、三時でお願いしますっ」
「了解致しました。それでは明日三時に、カフェ・カノンでお待ちください」
「はい」
電話が切れる気配がない。
「えっと……」
女の子の、困ったような声が聞こえる。
ひょっとして、電話を先に切ることが出来ないタイプなのかも知れない。
「……切りますね」
「あ、有難うございますっ。それではっ」
受話器を置いて、気づいた。
どうして、この近くに、カフェ・カノンがあると知っていたのだろう。

約束の三時を過ぎても、誰も来なかった。
「千早ちゃん、本当に来るの？　夢使い」
「夢使い？　来るよ。俺が保証する」
そう言ったのは、千早ちゃんではなくトキさんだった。
「この店の人間はみんな知ってる。常連だからね」
電話の子がこの店を知っていた理由は、あっさり分かってしまった。
夢使い。意外とメジャーな存在なのだろうか。
「特にあの子達は――」
トキさんの言葉が終わる前に、
「遅れて申し訳御座いませんっ！」
茶色い髪の男の子が、扉を開けて飛び込んできた。
トキさんが片手をあげて挨拶する。
「やぁやぁ、いらっしゃい」

「あ、トキさん、こんにちは」
男の子はぺこりと頭を下げた。
被っていた帽子を、肩掛けカバンにしまう。
「ツキノちゃんは？」
「風邪で休みです。で、依頼者さんはどちらに……」
「こっちでーす」
千早ちゃんが手を振った。
男の子が早足でやって来て、私の前に座る。
「遅れて申し訳御座いません、僕は夢使いのヒノです」
「きっ……、菊谷ひまわりですっ」
「そんな緊張しなくて良いよ。ヒノ君、こっちで言うと高一なんだから」
千早ちゃんが、笑顔で私を見上げた。
……こっちで言うと？　ヒノ君は外国の出身者なのだろうか。
「向こうでも高校一年ですよ。この世界と制度が同じみたいで」
「そっかー。すごい偶然だよね」
……この世界？　どういう意味なのだろう。
ヒノ君は、すごいですよね、と言って笑った。
「菊谷さん、ですよね」
「え？　え……っと、ひまわりでいい……よ？」
千早ちゃんが横から、リラックスリラックスと繰り返す。
「えーと、それではひまわりさん、依頼内容を詳しくお聞かせ願えますか？」
ヒノ君が言った。
そうだ、私は夢を消してもらおうと――
「あ、うん」
頑張って言葉を探してみたけれど、何も浮かばなかった。
怖い夢を消して欲しい、としか言いようがない。
黙り込んでしまった私を見て、ヒノ君が慌てた様子で、
「え、あ、すみませんっ、詳しくなくていいので、お聞かせ願えま

すか？」

怖い夢を消して欲しい。私は、そのまま伝えた。

一週目　土

店に入ったとき注文したカフェオレを、トキさんが持ってきてくれた。
「遅くなってゴメン。今日は給仕が休みで、一人減っただけでも結構大変なんだ」
言い訳だね、と言って、トキさんが笑う。
私はカフェオレを飲みながら、覚えている限りの夢の内容を言った。
話している間に、ヒノ君がカバンから緑色のスケッチブックとシャープペンシルを取り出した。
メモを取っている。幼稚園児が描いたような絵が、ちらと見える。
ふとシャープペンシルを止めて、ヒノ君が顔を上げた。
「部活とかなさってますか？」
「うん、一応」
「毎日ですか？」
「月曜から土曜までは大体。でも日曜はお休みなの」
「大丈夫なんですか、今日は土曜です……よね？」
「今日は大丈夫。午前だけだったから」
ヒノ君は胸ポケットにシャープペンシルを差し込んで、スケッチブックをテーブルに置いた。
カバンの中にがさがさと手を突っ込んで、銀色の小さな缶箱を取り出す。
「とりあえず、一日分お渡しします。寝る前に飲んでくださいね」
ヒノ君が缶箱から白い錠剤を一つ出した。
ケースの裏に、”夢使い協会　水なし一錠”と印刷されている。
「今日はツキノがいないので、ひまわりさんの夢を直接見ることが出来ないんです。明日の三時にまた伺います。薬が合わなかったら、言って下さいね」

私が頷くと、ヒノ君はぺこりと頭を下げて、慌てた様子で扉を飛び出していった。
スケッチブックは、テーブルの上にある。
「千早ちゃん、コレ……」
「……忘れ物、だね」
「や、やっぱりっ？」
私はスケッチブックを持って扉を開ける。
急いだつもりだったのに、ヒノ君はいなかった。
探して、渡さなきゃ。
そう思って扉を出ようとすると、トキさんに止められた。
「夢使いだからね、自分の世界に帰ったんだ」
そんなことを言われても、ぴんと来ない。
どうしたら良いか分からなくて、スケッチブックの緑色の表紙を見つめていた。
「明日会うんやったら、持っててもいいんちゃう？」
店の奥から声が聞こえる。パティシエのヒタキさんだ。
「ちゃんと仕事の前に渡したりやー」
ヒタキさんはひょこっと顔を出して、泡立て器を振りながら言った。生クリームが飛ぶ。
私は頷いて、スケッチブックをカバンに入れた。
カバンを肩に掛け、千早ちゃんを振り返る。
「行こうか？」
「うん」
カフェオレ代を払って、私は店を出た。トキさんが、生クリームを飛ばすなと怒っている声が聞こえる。
もう一度道の向こうを見てみたけれど、ヒノ君の姿は無かった。

家に帰って、私は部屋のベッドに座った。
寝る前に飲むようにと言われた錠剤を手に、考える。

悪夢を止める、という割には、頼りない。
錠剤を机の上に置き、私はカバンの中身を確認した。ヒノ君のスケッチブックは、ちゃんと入っていた。
表紙の緑色は鮮やかで、留め金も歪んでいない。まだ新しい。
ヒノ君は、一体何を書いていたんだろう。

ヒノ君に悪い気もするけれど、スケッチブックを開く。
読めないような字――でも多分日本語で、ごちゃごちゃと何か書いてある。次のページには、芽が出たジャガイモのようなものが描かれていた。幼稚園児がクレヨンで描いたような、勢いのある、でも上手とは言えない絵だった。
その次のページにも、読めないような字のメモがあった。菊谷ひまわり、芹千早さんのお友達、依頼者の人。そして、隅っこに書かれた”多分”という言葉。それだけは何とか読むことが出来た。多分、の続きはわからない。

母さんが、ご飯が出来たと呼んでいる。

一週二日目　芽

昨日は夢を見なかった。
あの錠剤のお陰だろうか。

私は、カフェ・カノンのカウンター席に座っていた。
隣には千早ちゃんがいて、ずっと携帯電話をいじっている。
「遅くなってごめんなー」
関西風のイントネーションと共に、扉が開いた。
パティシエール兼給仕係でヒタキさんの妹の、ツバメさんが大きな紙袋を下げて入ってきた。
千早ちゃんより少し高いくらいの身長と、ツーサイドアップにした肩までの髪が、幼い雰囲気を出していた。大学生なのによく中高生に間違われると言っているのを聞いたことがある。
「ツバメちゃん、これでいいん？　ちゃんと足りてるー？」
一緒に入ってきたのは、同じクラスで同じ部活の枳音子（からたねこ）ちゃんだ。
ツバメさんと同じように、右手に大きな紙袋を持っている。左手には、花の咲いていない植物の苗をビニール袋に入れて持っていた。背中を覆う長い髪を、今日はお団子にしてまとめていた。手を振ると、笑って手を振り返してくれた。ちょっと危なっかしい。
そういえば、音子ちゃんはヒタキさんのいとこだ。前にヒタキさんが冗談で、”この店の中では、音子は食物連鎖の頂点に立っている”と言っていた。
「ちーさんごめんなー。手ふさがっててメール打てへんかった」
「あ、それでか。ダイジョブダイジョブ、急ぎの用事でもなかったし」
千早ちゃんが右手をヒラヒラさせながら言った。
音子ちゃんはもう一度謝って、
「今日、ヒノ君来るんやろ？　あと五分やんなぁ」

「うん」
私は店の時計を見た。二時、五十五分。
ヒノ君のスケッチブックはカバンに入れて、隣の席に置いてある。
「今日はツキノちゃん来ると思う？」
「どうやろ。風邪治ってたら来るんちゃう？」
音子ちゃんとツバメさんの会話を聞きながら、私は窓の外を見ていた。
扉の両側に、硝子の窓がある。それを通して、道を行く人達を眺めていた。
「こんにちはー」
扉が開く。ヒノ君の声がする。
私は驚いて、扉に目を移した。
ヒノ君の後ろに女の子が立っている。黒のブラウスに、黒いジャンパースカート。黒髪は肩を過ぎたあたりで切りそろえられていた。
真昼なのに、何故かランタンを持っている。
きっと、この子がツキノちゃんだろう。
「昨日は、ご迷惑をおかけしました」
ツキノちゃん（多分）がお辞儀する。

私はずっと窓の外を見ていたはずなのに、ヒノ君とツキノちゃん（多分）が通るところは見えなかった。
――自分の世界に帰ったんだ。
昨日、トキさんはそう言っていた。
本当に、そうなのかもしれない。

ツバメさんが荷物を置いて、ツキノちゃん（多分）に声を掛けた。
「風邪治ったん？」
「はい。三錠飲んだらすぐ治るっていうお薬があったんです」
「熱とか出ーへんかった？」
「昨日は三十七度九分でした」

「えーっ、大丈夫なん？」
「三十八度以下は熱じゃないです」
ツキノちゃん（多分）は、眩しいくらいの笑顔でそう言った。
……大丈夫かな。
「貴方が菊谷さんです……よね？　昨日は申し訳御座いませんでした。夢使いのツキノと申します」
「あ、ひまわりで良いよ。無理しないで」
ツキノちゃん（確定）は、口元に手を添えて言う。服が黒い所為か、肌の白さが際だっている。正直、かなり可愛い。
「ヒノ、今日の仕事は？」
「ちょっと待って、スケッチブック出すから。……無い」
「忘れちゃったの？」
「そうかも。取ってくるからちょっと待って」
ヒノ君は持っていたカバンをカウンターに置いて、慌てた様子で扉に走った。
「待って！」
ヒノ君が足を止める。
「スケッチブック、私が持ってる。昨日、忘れていったでしょ？」
ヒノ君は視線を斜め下に落として、考える素振りを見せた。
目を大きく開き、
「あ！　すみませんでした、有難うございます」
ぺこりと頭を下げる。そして、席に戻ってきた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0964c/

太陽とひまわり

2010年10月15日10時37分発行